

平成 23 年 5 月 12 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20510250

研究課題名 (和文) 看護師のジェンダー意識と患者の性に関わる倫理的問題との
関連性の研究(英文) Study on nurses' awareness of their own gender identity
and ethical issues around patients' sexuality

研究代表者

兼宗 美幸 (KANEMUNE MIYUKI)

埼玉県立・保健医療福祉学部・准教授

研究者番号：50214490

研究成果の概要 (和文)：この研究の目的は、看護師の性に対する認識を高め、患者の性に関する倫理的問題への認識を高める学習プログラムの作成である。認識を高めるにはまず自分の性意識に気づく事が重要である。その上で患者の性的言動に対し倫理的な側面で語り合う事が有効と考える。具体的には、事例をもとに意見感情を語り合う。次に事例に対しアドバイザーの助言を借りて倫理的問題をディスカッションする方法である。

研究成果の概要 (英文)：The purpose of this study is to create a program that promotes deeper awareness among nurses of ethical issues related to patients' sexuality by improving their understanding of sexuality. The results of the research indicate that in order to promote nurses' awareness of these ethical issues, it is important to first increase awareness of their own gender identity. Then, the proposed next step is to have a discussion on patients' sexual behavior from an ethical point of view. The program consists of two steps of discussion. First, nurses will participate in an open-ended discussion about a case study, freely expressing their opinions and emotional reactions. Then, they will proceed to a structured discussion facilitated by an advisor on identified ethical issues.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー

キーワード：セクシュアリティ

1. 研究開始当初の背景

看護の対象は人間とその生活であるにもかかわらず、過去の国内外の看護理論では「人間の性」(ジェンダー、セックス、セクシュアリティ)の視点は顕在化していなかつ

た。

日本の看護基礎教育課程において「人間の性」に関する内容が公的に導入されたのは1990年のカリキュラム改訂以降と歴史は浅く、まだ体系化されているとはいえない。臨

床現場で働く多くの看護師は「人間の性」について学ぶ機会が全くないか、または十分でないままに看護援助を実践している。看護実践の意思決定に関する女性看護師への調査では、「患者の性生活について決して尋ねたりしない」の回答は40歳代以上で5割を超え、全体でも4割に達していた。

一方、1994年のカイロ国際人口・開発会議におけるリプロダクティブ・ヘルス/ライツの提唱以降、人間の性と生殖に関わる健康と権利について国際的な取り組みが進められている。我が国では社会や個人のあり方・価値観が急激に変化する中で、保健医療の現場でも性と生殖に関わる問題への取り組みが試行されている。高齢者、しょうがい者(児)、泌尿器疾患患者、産婦人科患者、脳血管障害患者、糖尿病患者、がん患者、心疾患患者、妊産婦、認知症患者など様々な事例があり、援助の対象者は特別な存在ではないことがわかる。

しかし、これら看護援助の内容の吟味や有効性の検証は緒についたばかりである。この背景には性と生殖に関わる問題は、患者だけでなくパートナーの価値観や患者の文化的・宗教的な信念、俗説・誤解、性に関する生物的・心理社会的な知識、性に関する話題を話すことなどの影響を受け、多彩な現れ方をするという特徴がある。さらに、「性についての確たる原理が存在しない我が国」においては患者の性に関わる問題の是非を問いくい状況も皆無ではない。

そのため、患者の性に関わる看護援助について、患者の心身の健康および権利の擁護の観点から内容や有効性を検討するべきだといえよう。われわれの先行研究では、母への育児指導、脳血管疾患患者の性的言動への対応、在宅療養患者の家族支援、患者の言動に悩む新人看護師の指導、性的問題の臨床経験に関して、患者中心の観点といえない回答もあった。

このように、性に関わる問題は倫理的なジレンマに陥りやすい。ジレンマを倫理的問題の視点から分析することによって、適切で実践可能な援助ができるといわれている。性に関わる問題も倫理的ジレンマとしてとらえることによって、患者中心の視点、多角的な分析によってケアの方向を見出しやすくなると考えられる。しかし、看護倫理に基づく尺度のうち性の関わる表現が見られたのは看護の専門職的自律性の尺度のみであり、倫理的問題の体験項目や道徳的感性の尺度には明示されていなかった。

倫理的問題の分析に不可欠な、感性の育成に影響すると考えられる、「人間の性」(ジェンダー、セックス、セクシュアリティ)および年齢やキャリアに関して、影響の程度を確認する必要がある。

看護師の患者の性に対する受容の寛容性は、教育レベルや性に関するケアの必要性の認識の経験、助産師資格と関連している。性に関わる問題の倫理的な視点での分析は、性に関するケアの必要性の認識を高める経験につながると考えられる。

また、未婚の女性看護師が性に関わる問題に遭遇した時の態度に関して、危機的状況における葛藤から回避へと変化し相手を拒否する場合もあるが、他者からの精神的サポートが得られた場合には職業的アイデンティティの確立を目指して「患者の性の受容」「専門職として対応」に移るといわれている。このような変化にはサポートや、第三者に相談する場の保障が重要といわれており、支援プログラムの作成にあたっては基盤となる考え方といえる。

研究者が先行して行った「看護師のジェンダー・アイデンティティが看護援助に及ぼす影響の実態に関する研究(課題番号17510232平成17年度～19年度)」での成果を踏まえて研究を実施していく。

2. 研究の目的

本研究は、患者の尊厳を尊重した看護援助を実践するための方策について、特に患者の性に焦点をあてて、ジェンダーやセクシュアリティ・倫理的問題・看護師のキャリアの視点から明らかにし、看護師の支援プログラムを作成することを目的としている。

3. 研究の方法

以下の3点について、「看護師のジェンダー・アイデンティティが看護援助に及ぼす影響の実態に関する研究(課題番号17510232平成17年度～19年度)」での成果を踏まえて研究を実施した。

(1) 男性看護師を対象とした無記名自記式質問紙調査および半構成的面接調査

日程：2008年11月2009年3月

対象：全国の100床以上の総合病院から無作為に抽出した94病院のうち、管理者の理解と協力が得られた30病院の男性看護師

方法：保健医療施設の看護管理者に調査の理解と協力を打診し、協力が得られた施設に対して必要な手続きをとった上で調査対象者の選出を依頼する。倫理的な配慮をしながら調査対象者の主体的な理解と協力が得られた場合に調査を実施する。

半構成的面接では了解が得られた場合には、音声録音する。

内容：以下の項目を質問紙と半構成的面接で調査する。

- ・ジェンダーやセクシュアリティに関する意識(先行研究と同様)

- ・ジェンダーやセクシュアリティに関する意識(先行研究と同様)
- ・性に関わる倫理的問題の経験
- ・倫理に関する知識について
- ・教育レベルや性に関するケアの必要性の認識の経験について

倫理的配慮：施設への打診および調査対象者への説明および調査中は、人権の保護に努め調査の同意が得られない場合でも不利益を被らないこと、調査の中断の自由や個人情報保護を遵守し、データは研究以外使用しないこと、研究終了時はデータの消去を行うことを説明する。また、所属大学の倫理審査委員会での審議を終えて承諾を得た後に研究を実施する。

(2)患者の性に関わる倫理的問題に対応するための看護師の支援プログラム試行と評価
「人間の性」(ジェンダー、セックス、セクシュアリティ)の知識・意識や、患者の性にかかわる倫理的問題への専門職としての対応を習得するための支援プログラムの具体例を作成し試行した。

日程：2009年8月

対象：臨床経験を有する看護師5名

方法：研究目的と方法および倫理的配慮を説明し、理解と協力を得られた場合に120分間のプログラムの参加を求めた。

プログラムの内容：「人間の性」やプログラムに対する事前・事後調査や、術後に性的反応がある患者の事例や陰部洗浄に戸惑う新人看護師の事例に対するディスカッション、アドバイザーによる解説である。

調査内容：以下の項目を質問紙で調査する。

- ・プログラムに対する事前・事後評価(3段階および自由記載)
- ・ジェンダーやセクシュアリティに関する意識(先行研究と同様)
- ・性に関わる倫理的問題の経験
- ・倫理に関する知識について
- ・教育レベルや性に関するケアの必要性の認識の経験について

倫理的配慮：施設への打診および調査対象者への説明および調査中は、人権の保護に努め調査の同意が得られない場合でも不利益を被らないこと、調査の中断の自由や個人情報保護を遵守し、データは研究以外使用しないこと、研究終了時はデータの消去を行うことを説明する。また、所属大学の倫理審査委員会での審議を終えて承諾を得た後に研究を実施する。

(3)看護師の性に対する認識と患者の性に対する倫理的問題への認識を高める学習プログラムの作成

過去2年間の研究成果を踏まえ、患者の尊厳を尊重した看護援助を実践する方策につ

いて検討し、看護師の性に対する認識と患者の性に対する倫理的問題への認識を高める学習プログラムの作成を実施した。

4. 研究成果

(1)男性看護師を対象とした無記名自記式質問紙調査および半構成的面接調査

質問紙調査では男性看護師の持つ「人間の性」に関するイメージや知識および、看護師が臨床で関わる実際的な倫理的問題への認識を調査した。全国の100床以上の総合病院から無作為に抽出した94病院のうち、管理者の理解と協力が得られた30病院の男性看護師を対象とした。調査の目的や方法、倫理的配慮について説明した趣旨書を質問紙と個別回収用の切手付封筒ともに289部配付し、質問紙の返送をもって同意を得たとみなし、有効回答155部を回収(回収率53.6%)した。

半構成的面接調査では、臨床での倫理的問題への具体的対応や対応の背景にある「人間の性」に関するイメージや経験、看護職に関する認識を問うた。A県内の7病院39人の男性看護師のうち15人(回答率38.4%)が書面および口頭で同意して回答した。

平均年齢は男性33.6歳で、経験年数は0~5年が最も多く約4割であった。臨床での性に関する倫理的な問題の経験は、男性は「あった」が最多の60名(45.5%)で「なかった」は26名(17.0%)であった。その経験内容は、異性患者による女性看護師への加害数%、異性患者の生活援助場面での選択は3割であった。

今回の性に関する問題の経験は高くはなく、内容の偏りがあった。看護師の性に関する倫理的な問題に対する認識や性の尊厳を護る援助の認識の不足が示唆された。

男性看護師を対象とした性に関する倫理的な問題の質問紙調査の回答では、性に関する倫理的な問題の経験が低かったことから、臨床での看護師の性に関する倫理的な認識が低さと認識を高める学習等について検討が必要と考えられた。

(2)患者の性に関わる倫理的問題に対応するための看護師の支援プログラム試行と評価

「人間の性」(ジェンダー、セックス、セクシュアリティ)の知識・意識や、患者の性にかかわる倫理的問題への専門職としての対応を習得するための支援プログラムの具体例を作成し試行した。

臨床経験を有する看護師5名に研究目的と方法および倫理的配慮を説明し、理解と協力を得られた場合に120分間のプログラムの参加を求めた。事前に所属施設の倫理委員会の審査を受けた。

プログラムの内容は、「人間の性」やプロ

グラムに対する事前・事後調査や、術後に性的反応がある患者の事例や陰部洗浄に戸惑う新人看護師の事例に対するディスカッション、アドバイザーによる解説である

経過を逐語録で記録し、参加者の意識や倫理的問題への対応の変化を分析した。

対象者の背景は、20歳代3名、30歳代1名、40歳代1名で、全員配偶者はなく、子育て経験はなかった。平均6.8年間の、脳神経内科、婦人科、CCU、循環器・心臓外科、小児科、内科などでの臨床経験を持つ女性看護師5名は、プログラム実施前は、「男性患者がエロティックな言動をとるのは仕方がないことだ」は肯定的、「異性の患者の清拭や排泄援助はできるだけ避けたい」は否定的な回答であった。

ディスカッションで表れた性の認識は、以下の9カテゴリとそれぞれ2~3のサブカテゴリを抽出した。【性のイメージ】【性の認識】【性の学習】【性を尊重する内容】【性を尊重する分析や今後の課題】【性的反応への対応の内容】【性的反応への分析や課題】

【スタッフ間の連携】【自分の家庭環境】。事例の学習を通して、20歳代は【性のイメージ】や【性的反応】、【性を尊重する内容】の体験を表現し、30・40歳代は【性的反応の分析】を通して自身の【性の認識】を振り返った。時間経過とともに、自身の体験、それに伴う意見が多くなった。【性の学習】の話題も増えた。終了後の質問紙調査では、4名共に学習の必要性はあると回答し、認識がかなり変化した人が4名であった。

実施後の調査では「性に対する感じ方や考え方」に対して変化した3名、あまり変わらない2名、「患者の性に関する問題に関する考え方や対応」に対して変化した4名、あまり変わらない1名であった。プログラムの学習方法としての効果は「かなりある」3名、「ある」2名と肯定的な評価が得られた。

参加者は2事例の学習や情報提供を通して、患者の性を客観的に理解し、性の認識を深めた。性を自由に語りあう学習は性に関する認識を変化させたと考える。特に、世代の違うメンバー、アドバイザーの参加が認識を深めることに効果的であると考えられた。しかし、実施に当たっては指導者や能力や定期的実施などが挙げられた。看護師個人の能力を延伸するための支援プログラムとしての可能性が示唆された。

(3)看護師の性に対する認識と患者の性に対する倫理的問題への認識を高める学習プログラムの作成

過去2年間の研究成果を踏まえ、患者の尊厳を尊重した看護援助を実践する方策について検討し、看護師の性に対する認識と患者の性に対する倫理的問題への認識を高める

学習プログラムの作成を実施した。

看護師の性に対する認識と患者の性に対する倫理的問題への認識を高める学習プログラムの作成を目指した。

認識を高めるにはまず自分の性意識に気づくことが重要である。その上で患者の性的言動に対し倫理的な側面で語り合うことが有効と考えた。具体的には、まずは事例をもとに意見や感情を語り合う段階で、過去の経験や自身の養育環境などの語りや傾聴を通して、患者の性を客観的に理解する上で重要な自分自身の性の認識を深めた。次に事例に関して倫理的問題をディスカッションする段階で、アドバイザーによる情報提供や助言を通して患者の背景や患者の視点に立った状況の理解を深めた。特に、世代の違うメンバー、アドバイザーの参加が認識を深めることに効果的であると考えられた。

このような看護師の支援プログラムでは事例を身近に捉えることも重要であり、プログラムの運営や情報提供だけでなく、事例や提供する理論的情報の精査が今後は課題となる。また、性別によって性に関する認識の相違がみられる傾向にあるものの、患者の性的言動に対する看護援助は同様の傾向にあるが、認識を深めるディスカッションに関してどのような影響があるかの検討は十分ではないことも今後の課題と考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計0件)

【学会発表】(計7件)

① 兼宗美幸、「人間の性」に関する看護師の学習経験と認識について、第10回日本母性看護学会学術集会、2008年6月22日、大阪市

② 兼宗美幸、筑後幸恵、女性看護師のジェンダー意識と専門性意識、第18回日本看護学教育学会学術集会、2008年8月2日、つくば市

③ 筑後幸恵、兼宗美幸、男性看護師の「人間の性」に関する認識と学習課題について1、第50回日本母性衛生学会学術集会、2009年9月28日、横浜市

④ 兼宗美幸、筑後幸恵、男性看護師の「人間の性」に関する認識と学習課題について2 女性看護師との相違から、第50回日本母性衛生学会学術集会、2009年9月28日、横浜市

⑤ 兼宗美幸、筑後幸恵、男性看護師の患者の性にかかわる倫理的問題の対応 世代間の比較、第51回日本母性衛生学会学術集会、

平成 22 年 11 月 6 日、金沢市

⑥ 筑後幸恵、兼宗美幸、男性看護師の「人間の性」に関わる援助への意識 インタビュー調査から、第 51 回日本母性衛生学会学術集会、平成 22 年 11 月 6 日、金沢市

⑦ 兼宗美幸、筑後幸恵、性に関する倫理的な問題に対するグループディスカッション形式の学習の試み、第 30 回日本看護科学学会学術集会、平成 22 年 12 月 4 日、札幌市

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

兼宗 美幸 (KANEMUNE MIYUKI)
埼玉県立・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：50214490

(2) 研究分担者

筑後 幸恵 (CHIKUGO YUKIE)
埼玉県立・保健医療福祉学部・准教授
研究者番号：60310512